

安全性を持つ移動手段としての鉄道に関する研究 —ジェンダーの視点から

【2022年度 KR-094】

立命館大学 産業社会学部 現代社会専攻 准教授
富永 京子

1. 調査研究の背景

近年、交通・移動の領域でも環境配慮や倫理的消費に関する活動が行われている。こうした活動の一つとして、飛行機を使わず鉄道で移動する「flightshame」(Becken, Stantic, and Chen 2021, "Climate crisis and flying", Journal of Sustainable Tourism, 29) がある。

日本ではこうした活動は主流ではないが、代わりに電車のユニバーサル性、利便性、安全性が注目されている点を、申請者の過年度の研究で明らかにした（研友社『Annual Review No.24』参照）。ここから本研究では、鉄道の倫理消費的側面という論点を深めるため、社会的因素が強い論点としてジェンダーと安全性の観点から「移動」を捉える。

2. 調査研究の概要

本研究は、「フェミニスト観光学」(Aitchison 2005, Eger 2021) の枠組みを用いて研究を行う。この枠組は、女性のみならず障害者や外国人、若年層といったマイノリティが観光をどのように経験しているかという問題意識から生じた学問であるが、これは観光や交通といった分野にも十分適用可能であると考える。

申請者はこれまでの研究 (Tominaga 2020, 富永 2022 など) で、環境配慮や倫理的消費にかかわる動機から特定の移動手段（フェリー、鉄道、自転車等）を選ぶ人を対象に研究し、さらにその中で女性や障害者といったマイノリティの選定する手段が限定される点を明らかにした。本研究では特に「鉄道」を選定する上で、彼らがどのような社会的意義を込めるのかを検討する。

本研究では過去の調査協力者に対する聞き取り調査に加え、過去のこれまで対象としなかったマイノリティ属性を持つ人々 20 名に聞き取り調査を行うほか、女性やマイノリティの旅に関するドキュメントを通じて、移動中、とくに鉄道での移動プロセスにおいて、かれらがどのような点でマイノリティとしての経験をするのかを明らかにする。

フェミニスト観光学を主たる分析枠組みとしてデータを検討した結果、以下が明らかになった。

(1) 先行研究 (Cockburn-Wootton, Friend, and McIntosh 2006) によると、女性が一人で移動をする際に配慮する要素に危険回避がある。とりわけ女性の移動者はしばしば男性による性的視線にさらされる。先行研究では、女性が脆弱性を感じ、ハラスメントを恐れ、性的な視線から逃れるために多くの戦略をとることを「自己監視」と定義している。男性による性的な視線は、女性が自由な移動を楽しむことを妨げている (Jordan and Gibson 2005, Jordan and Aitchison 2008)。女性は、男性から女性を性的対象とみなすこのような視線を内面化するため、移動中の自分の安全を守るために常に行動するようになった。とりわけアジア人女性・中東人女性は、ジェンダーギャップが高い地域で生活していることもあり、より移動リスクの高さを認知している (Seow and Brown 2018, Brown and Osman 2017)。

(2) 実際に、女性や性的マイノリティ、あるいは障害を持つ移動者たちは、不適切とされるような時間や場所への移動を避ける、複数人で移動するなどの対応を行っており、この点は先行研究の知見とも合致している (Seow and Brown 2018, Wilson and Little 2008, De Jong 2017)。こうした人々は危険を避けるため、「治安の悪い場所」「治安の悪い移動手

段」を認知している。報告者は、とりわけ遠隔地への移動ほどそのリスクを事前に察知し、例えは船や飛行機、長距離バスや新幹線といった長距離の移動手段ほど多くの情報を収集し、危機回避に努めると考えていたが、かれらは近距離であっても同様の対応を行っており、長距離だからといって危険性が高いわけではない。先行研究は、むしろ長距離の交通手段だからこそ、危機回避のための手段（複数人の移動）によってマイノリティ同士の連帯が強まることを明らかにしている。これは、本研究でも見られるもので、例えは危機回避のために一緒に長距離の鉄道の移動をともにした女性たちは、人種や世代が違っても親密な関係を気づいていた。

(3) こうした「危険」を低減するために、マイノリティの人々は危険でない時間や手段を選択するという形で移動手段を選ぶだけでなく、移動手段を自ら安全なものにする努力を行っていた。空間をよりマイノリティにとって過ごしやすく変える試みの中には、制度的なものとしては女性専用車両や優先席、車いす用スペースの設置といったものが挙げられるが、鉄道利用者が自ら行うインフォーマルなものとしては「駅長の許可を得て、駅のトイレに生理用ナプキンを置いておく」(浮間あい: Twitter, <https://twitter.com/ukimacloset/status/1369906279062196225?s=20> (参照日: 2022年3月30日))、「痴漢行為に対する注意喚起のため鉄道会社に提言をし、マスコミを通じた周知をする」(山口憲生、王瑜: NHK首都圏ネットワーク, <https://www.nhk.or.jp/shutoken/net/20220210a.html> (参照日: 2022年3月30日))、「障害を持つ人々用の昇降設備を求める」(関根和弘: 朝日新聞Globe, <https://globe.asahi.com/article/14328819> (参照日: 2022年3月30日))といった試みが挙げられる。鉄道や駅が誰にとっても身近な空間であるからこそ、こうした変化の試みはマイノリティにとって他の利用者との連帯感や自己効力感をもたらすものとなる。とりわけ興味深いとされる事例として、福岡県のJR駅に生理用ナプキンを置くことで、より女性にフレンドリーな空間としての駅を作り上げるだけでなく、その試みが男女共同参画協議会や市議会議員を通じて、市内全域の公共空間に広がっていくさまが分かる一連の活動がある。

ここで興味深いのは、「駅」という空間の多様性・公共性である。基本的にこの活動は「駅」の利用者に対するものであるが、配布物の性格から言って敢

えて駅に設置する必然性はない。鉄道が発着し、人々の移動のターミナルになるという場の性格よりも、むしろ多様な人々が合流する場としての駅の性格に着目した活動だと考えられる。マイノリティ移動者は「駅」という場所の公共性をうまく用いて、市議会や男女共同参画協議会、マスコミに訴えかけているとも言える。この点で、日本における鉄道駅の公共空間としての可塑性・可能性が読み取れるとも考えられるだろう。

(4) 環境配慮や倫理的消費にかかる動機から特定の移動手段（フェリー、鉄道、自転車等）を選ぶ人々以外であっても、女性を中心とするマイノリティの人々は、回避行動や防衛行動など、さまざまな方法で恐怖を低減するよう試みているとされてきた (Coble et al. 2003)。例えはそれは、夜間の移動を減らす、他の人と一緒に移動する、移動する場所を変えるといった手段である。しかし、本研究で見た社会的的理念に基づき移動手段を選ぶ人々は、より積極的に安全な移動手段の形成へとコミットしていた。

(5) このように、自らの過ごしたいように安全性を担保するよう、空間そのものを変革したり空間をめぐる制度そのものの変更を要求するタイプの活動は Prefiguration という概念とともに知られており、先行研究の議論では公園や広場での試みを検討することが多かった (Reinecke 2018, Carroll, et al. 2019)。本研究が対象としたマイノリティは「鉄道」や「駅」をも公共空間の一部として捉え、危険性の低減を希求した点で独自性を持つ。また、日本において、鉄道と駅が公園や広場に並ぶ公共空間として多くの人々に親しまれていることもまた明らかになった。

以下の知見をまとめると、下図のような形となる。欧州と比較した場合の独自点として、日本の移動者は、交通機関の消費者として選択するのみならず、より積極的に制度や企業に対してコミットする。また、欧米における広場や公園といった空間に対し、駅や鉄道内が自由や安全を希求するスペースとして用いられているのも興味深い。この点に関しては、都市空間研究などの知見を援用しつつ考究する必要があるだろう。

3. 考察と今後の議論

本研究では、移動手段としての鉄道だけない、

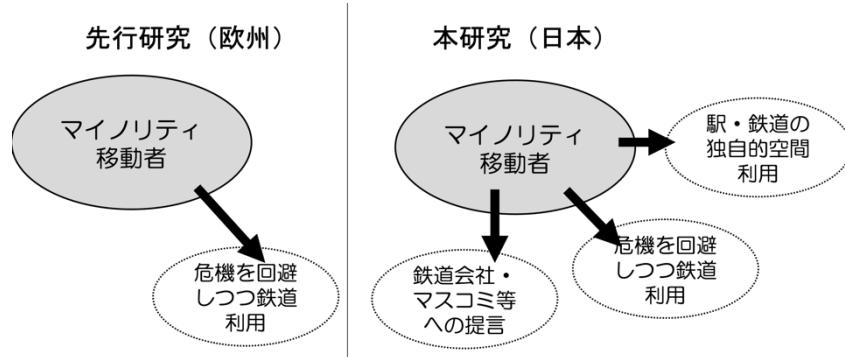


図1 欧州と日本におけるマイノリティ移動者の安全確保・危険性低減行動

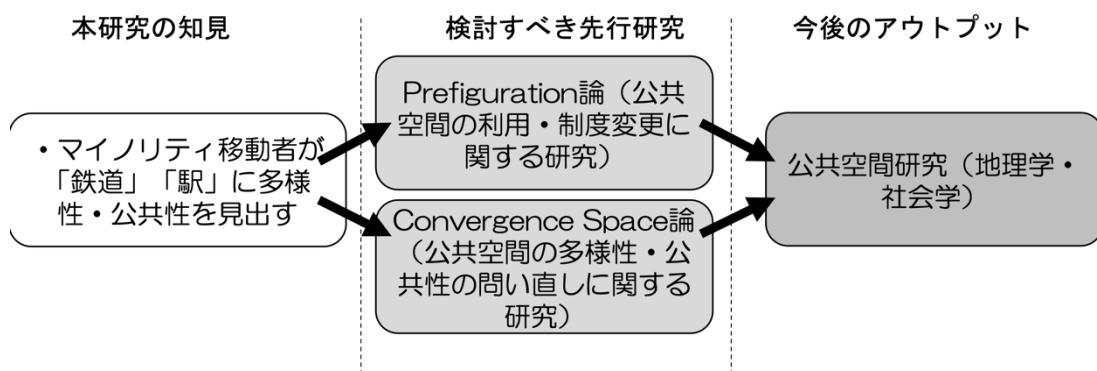


図2 今後の研究の方策

可塑的な公共空間としての鉄道ないし駅の可能性について提示することができた。例えば広場や公園といった都市空間が世界的に用地制限の対象となつておる（Reinecke 2018）、危険性が低減され安全性が担保されると考えられる一方、それは誰のための安全性なのかと考えたときに、場をめぐる「安心」「安全」は誰のものなのか、それはいったい十全であるのかという問い合わせを、マイノリティの移動者は「駅」「鉄道」といった場を通じて行っていると考えられる。

このような試みは、先行研究を渉猟する限り日本独自だと考えられるが、なぜ「駅」や「鉄道」が公共空間としてこれまでに親しまれるようになつたのか。今後の研究では、その点を明らかにしたい。

□

謝辞等

本調査研究を行うに当たり研友社、大林財団、窓研究所、トヨタ財団、全労済協会の支援を得た。

参考文献

- 1) Aitchison, C.: "Feminist and Gender Perspectives in Tourism Studies: The Social-cultural Nexus of Critical and Cultural Theories", *Tourist Studies*, Vol. 5(3), pp.207-224, 2005
- 2) Tominaga, K.: "Protest journey: the practices of constructing activist identity to choose and define the right type of activism", *Interface* 12 (2), pp.19-41, 2020
- 3) Tominaga, K.: "Social Reproduction and the Limitations of Protest Camps: Openness and Exclusion of Social Movements in Japan", *Social Movement Studies*, 16, pp.269–282, 2017
- 4) Cheryl Cockburn-Wootten, Lorraine Friend, and Alison McIntosh: "A discourse analysis of representational spaces: Writings of women independent traveller", *Tourism*, Vol. 54(1), pp.7-16, 2006
- 5) Dana Seow and Lorraine Brown: "The solo female Asian tourist", *Current Issues in Tourism*, Vol. 21(10), pp.1187-1206, 2018

- 6) Jordan, F. and C. Aitchison: "Tourism and the Sexualisation of the Gaze: Solo Female Tourists' Experiences of Gendered Power, Surveillance and Embodiment", *Leisure Studies* 27(3), pp.329–49, 2008
- 7) Jordan, F. and H. Gibson: " 'We're Not Stupid . . . but We'll Not Stay Home Either': Experiences of Solo Women Travelers", *Tourism Review International* 9(2), pp.195–211, 2005
- 8) Brown, L., de Coteau, D., and Lavrushkina, N.: "Taking a Walk: The Female Tourist Experience," *Tourist Studies*, Vol. 20(3), pp.354-370, 2020
- 9) Coble, Theresa G., Steve W. Selin & Beth B. Erickson: "Hiking Alone: Understanding Fear, Negotiation Strategies and Leisure Experience", *Journal of Leisure Research*, 35, 1, pp.1-22, 2003
- 10) Reinecke, J.: "Social Movements and Prefigurative Organizing: Confronting Entrenched Inequalities in Occupy London", *Organization Studies*, 39(9), pp.1299-1321, 2018
- 11) Carroll, P., Calder-Dawe, O., Witten, K., and Asiasiga, L.: "A Prefigurative Politics of Play in Public Places: Children Claim Their Democratic Right to the City Through Play", *Space and Culture*, 22(3), pp.294-307, 2019
- 12) Lorraine Brown & Hanaa Osman: "The female tourist experience in Egypt as an Islamic destination", *Annals of Tourism Research* 63, pp.12–22, 2017
- 13) Jong, A de.: "Rethinking activism: tourism, mobilities and emotion", *Social & Cultural Geography*, Vol.18(6), pp. 851-868, 2017
- 14) Eger, C.: "Gender matters: Rethinking violence in tourism", *Annals of Tourism Research*, Vol. 88, 2021